

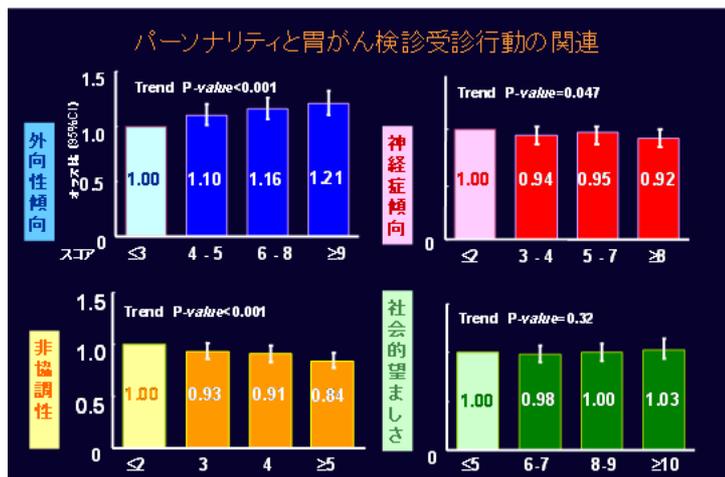
胃がん検診受診率が高い者は、外向性傾向が高く、神経症傾向・非協調性が低い：宮城県コホート

Personality and Gastric Cancer Screening Attendance: A Cross-Sectional Analysis from the Miyagi Cohort Study.

2009年 Journal of Epidemiology 発表

わが国の胃がん死亡率は依然として高い水準にあります。その原因の一つとして胃がん検診受診率の低さが指摘されています。これまで、がん検診受診行動に影響する要因の一つとしてパーソナリティが注目され検討されてきましたが、いまだ結論が得られていません。本研究では、一般地域住民を対象として、パーソナリティと胃がん検診受診行動の関連を横断研究の手法により検討しました。

厚生労働省のガイドラインでは胃がん検診は年1回の受診が勧められています。そこで、この研究では、対象者を過去5年間で5回以上継続して胃がん検診を受診した者、4回以下の者の2群に分けて、パーソナリティとの関連性を比較しました。その結果、胃がん検診を継続して受診した者は、外向性傾向が高く、神経症傾向・非協調性が低いという関連が示されました(図)。一方で、対象者を過去5年間で1回以上受診した者、1回も受診しなかった者の2群に分け、パーソナリティとの関連性を比較しました。その結果、胃がん検診を過去1回でも受診した者は、外向性傾向が高く、非協調性が低いという関連が示されましたが、神経症傾向との関連は示されませんでした。以上から、胃がん検診受診率向上のためには、外向性傾向、非協調性を考慮した受診勧奨が必要であると考えられ、更に継続受診の向上のためには、神経症傾向を考慮したアプローチが必要であると考えられます。



研究のデータについて

宮城県内14町村に居住する40-64歳の住民全員に、生活習慣に関する質問票及びパーソナリティに関する質問票 Eysenck Personality Questionnaire-Revised (EPQ-R) を配布しました。質問票においては、過去5年間の胃がん検診の受診回数を尋ねました。21,911名の解析対象者に対し、胃がん検診の受診状況とEPQ-R下位尺度との関連を検討しました。

パーソナリティについて

パーソナリティに関するEPQ-Rは、「E尺度：外向性傾向」「N尺度：神経症傾向」「P尺度：非協調性」「L尺度：社会的望ましさ」の4つの下位尺度で構成されています。本研究では、EPQ-Rの各下位尺度のスコアを対象者数が均等になるように4分位に分け、最小4分位群を基準として多変量ロジスティック回帰分析にて「遵守者」のオッズ比を算出しました。

他のリスク要因の影響について

この研究では、パーソナリティ以外の胃がん検診受診に関連すると考えられる要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、年齢、性、BMI、がん家族歴、疾患既往歴(これまで心筋梗塞、脳卒中、高血圧、腎臓病、肝臓病、胆石・胆のう炎、糖尿病、結核・肋膜炎に1つ以上罹患したことがある)、歩行時間、飲酒、喫煙、婚姻状況、最終教育年齢について、グループ間に偏りがないように、統計学的な処理を行いました。

研究の特徴と限界について

この研究で、パーソナリティ（外向性傾向、神経症傾向、非協調性）と胃がん検診受診との関連が示されました。この結果は、一般住民を対象とした大規模な調査で、様々な要因の影響を考慮し解析して得られたものであり、これまで同様の調査を行ってきた横断研究と比べて信頼度が高いと考えています。

ただし、この研究では、横断研究であるため、時間的な前後関係は不明であるということ、自己回答の受診回数を用いているということ、多くの除外項目を設けた結果、対象者が回答者の42%となったという限界があります。ただし、解析対象者と除外者の基本特性・生活習慣には大きな違いは示されませんでした。
